

アジアでレースを楽しむ文化を育む 「スーパー耐久アジア」設立

多くのアマチュアドライバーがモータースポーツを楽しむ場として、日本で 27 年の歴史を重ねてきた耐久レース「スーパー耐久シリーズ」が、2019 年、「スーパー耐久アジア」を立ち上げる。

設立メンバーは、事務局長の桑山晴美、2018 年よりスーパー耐久にも参戦、アジアのモータースポーツ界をけん引するマーチーリー、そして同じく 2018 年よりスーパー耐久にドライバーとしても参戦している元 F1 ドライバーのアレックス・ユーンを、スーパー耐久アジアアドバイザーに迎える。

2018 年のスーパー耐久は、富士 24 時間大会を開催し成功、タイヤワンメイクサプライヤーとしてピレリとのパートナーシップを結ぶなど、話題多き 1 年を送ってきた。

「スーパー耐久」は、最小限の範囲で改造を許可する市販車両が、排気量や駆動方式別のクラスに分けられている。2011 年からは、FIA GT3 車両、2017 年からは GT4 車両、TCR 車両が参加できるクラスも新設され、今では合計 8 クラスから編成されている。近年の年間エントリー台数は、過去最大となる 60 台前後を保持、アジアのチームやドライバーも、エントリーリストに名前を連ねるようになってきた。富士 24 時間大会だけでなく、各サーキットの特色を生かしたレースフォーマットが用意されており、2019 年からは、鈴鹿 10H もシリーズのスペシャルラウンドとして加えられ、「ST-X」クラスの GT3 車両のみが参戦できるようになる。また、新設された TCR や GT4 も大切にしていきながら、歴史に裏打ちされる独自のクラス ST2~5 クラスをより強化していくために、車両規則をもっとシンプルにわかりやすくしていくことにも着手していく。

スーパー耐久は、レースはガチンコ勝負、でも「楽しさ」を忘れないレースの代表格として、27 年の歴史を生き抜いてきた。パドックやピットでは、ライバルたちがひしめきあっても、楽しさに満ち溢れている。それを、多くの参加者や来場者は、スーパー耐久独自の「ゆるさ」と表現する。

近年、速度差のあるレースだからこそ、安全面にも力を注ぐ。2018 年の完走率は、平均約 90%。規則で縛るだけでなく、さまざまな独自の施策を実施し成果を上げている。多くのドライバーたちも協力、このレースに関わる全ての人々が、「スーパー耐久」をこれから先もつないでいこうという気概に満ちている。

スーパー耐久アジアでは、香港にも窓口を設ける。近い将来、アジアの方々を、日本のスーパー耐久で乗りたいチームや車へ紹介するシステムも確立したいと考えている。「スーパー耐久とは？」を知っていただくために、象徴となる大会を 1 戦、開催することも予定されている。この大会は、多くのジェントルマンドライバー、アマチュアドライバーがより参加しやすいレースとして位置付けるため、ST-

X(GT3)クラスを除くクラス編成にて展開される。日本のチームがアジアに渡り、参戦しなければならないシリーズ戦にはせず、日本のチームは自由に参加でき、招待チームも作る予定。またこのスーパー耐久アジアの1戦に出場したアジアチームは、日本のスーパー耐久に特別参戦できる仕組みなども考えられている。日曜日は観客も参加者も休むことができるよう、大会は、土曜日の夕刻から夜にかけての耐久レースにしたいとしている。

■事務局長 桑山晴美

今、目まぐるしいスピードで世の中が変わってきている中で、大事なものは、感性と勘、スピードと実行力。それに相応しいパートナーとめぐりあえたことで、今まで以上にスーパー耐久に力を注ぎたい。これから車業界は大きな変革の時を迎える。だからこそ、趣味性の強いレースの価値を次世代につなげていきたい。またその裏側で未来に照準を合わせた新しい斬新なプランにも挑戦していく。

参加型レースでも、観客の皆さんが足を運んでくれることにも、引き続き挑戦していきたい。この数年で、チームの皆様、ファンの皆様、我々が一体になっていることをより感じている。それをアジアにも広げていきたい。参加してくださるアマチュアドライバー、ジェントルマンドライバーのためにも、少しでも観客がいる環境を作りたいと思っている。これからも常識にとらわれずに、何が「今」なのかを考えて発展させていきたい。

■マーチー リー/スーパー耐久アジア アドバイザー

フェニックスレーシングアジアとして今年、スーパー耐久に参戦をした際、このシリーズがどれだけ多くの人々に愛されているかを目の当たりにして、とても驚いた。このシリーズは、プロとアマチュアのドライバーやチームが、いっしょになってレースを楽しむことができるパーフェクトバランス。皆がお互いにリスペクトし合い、レースそのものの質も非常に高い。約60台がスタートグリッドに並んだ姿は、忘れがたい光景だった。このレースは、まさにアジアの人々が求めているレースだ。

■アレックス ユーン/スーパー耐久アジア アドバイザー

アジアでは、多くのチャンピオンシップが開催されているが、ショーとしては楽しいけれども、ローカルの人が自分たちで楽しめるレースは、ほとんどないに等しい。しかし、スーパー耐久は、誰もが気軽に参加できる。僕たちには、ローカル企業に対しても、貢献できるレースが必要だ。まさにそれがスーパー耐久である。